

第 33 回 安田女子大学・安田女子短期大学 エッセイコンクール

課題部門 テーマ：家族について思うこと

学長賞「母と私の、涙のはなし」

文学部日本文学科 4 年 2 組 大石 来実

昔から、よく泣く子どもだった。

映画館に行けば予告映像で泣いていたし、授業中にこっそり読んでいた本で涙が止まらなくなって、先生を困らせてしまったこともある。

泣きすぎだと、幾度となく言われてきたが、私からすると、どうしてみんなは泣かないのかが不思議だった。だからこそ、人が涙を流す瞬間を、特別なもののように感じてしまう。

私は、母が涙を流した二度の瞬間を、今でも鮮明に覚えている。

一度目は、私が小学五年生の頃。

体調不良で病院に行った私は、念のために受けた血液検査で、余命宣告をされることになる。

「頭を打てば死にます」それが、私の人生初の余命宣告だった。

驚きのあまり言葉も出ない私と母をよそに、先生は淡々と説明を終え、あっという間に入院する病院が決められた。お会計の順番を待合室で待っている、たった数分の時間が、何十分にも、何時間にも感じられた。不安になって、隣に座っている母を見ると、母が、泣いていた。その姿を見て、いつもすぐに泣く私が、今は泣いていないことに気が付いた。それに気が付いたら、同時に涙があふれてきた。

「ごめんね」と、何度も繰り返しながら涙を流す母を見ても、私は、どうして母が謝っているのが分からなかった。「元気な体に産んであげられなくて、ごめんね」と、母が言う。

「私の方こそ、病気になってごめんね」そう言いたかったのに、私は母に何も言うことが出来なかった。

翌日から始まった入院生活は、想像していたよりも何倍もつらいものだった。自分の足でいつも通りしっかり歩けるのに、移動はすべて車いすで、トイレすら自由に行かせてもらえない。骨髄検査は、今までに経験したどんな怪我よりも痛かったし、点滴の副作用で

嘔吐を繰り返した。そのたびに母は「ごめんね、ごめんね」と言いながら、私の背中を撫で続けてくれた。もしかしたらあの時も、母は泣いていたのかもしれない。

二度目は、私が中学一年生の頃。

両親の離婚が決まった。あの頃、私たち家族は小さなことでも喧嘩ばかりしていて、父は大声で私たちを怒鳴りつけた。私と姉はその声を聞いて、いつも泣いていたが、父が出ていくまで、結局母は一度も泣かなかった。

父が家を出ていく日、父は私と姉に「離れていても、お父さんはずっとお前たちのお父さんだから」と告げた。

不思議なことに、別れの場面では、喧嘩をしていた毎日よりも、優しくあった頃の父の記憶ばかりが甦る。私たちはこの先も、何か月に一度くらいは会って、一緒に食事をしたり、どこかに出かけたりするんだろうな、と、その時は思っていた。

あの日から、父が私たちに会いたいと言ったことは、今まで一度もない。

父が出て行ったあと、母は私と姉に「これからは、三人で頑張っていこうね」と言った。その時になって、母はようやく涙を流した。私はこの時まで、母はとても強い人だと思っていた。

でも、本当の母は、きっと弱い。

ずっとずっと、一番泣きたかったのは、母だったのだろうと思う。まだ学生で、お金のかかる私と姉を、これから一人で育てていかなければならない不安と、一度は生涯を誓った相手を失った悲しみは計り知れない。

普通、「家族」と言われれば、まず思い浮かべるのは両親の姿だろう。

でも、私は違う。

私の思い浮かべる「家族」は母と姉。それから、ペットの犬。

私の思い浮かべる「家族」にもう、父の姿はない。父はそれを、悲しいと思うだろうか。

それとも、私たちのことなどすっかり忘れて、どこかで新しい人生を生きているのだろうか。

どちらにせよ、私は、父からの「会いたい」という言葉を待つことを、とうの昔にやめてしまっている。よくあるドラマのようなハッピーエンドは、私と父の物語には訪れなかった。

私の家族はきっと、普通という言葉で片付けるには、少しいろんなことがありすぎたのだと思う。でも、だからこそ、今の家族の形があり、私は昔よりも、家族に自分の弱さを見せられるようになった。

二分の成人式という学校行事で母からもらった手紙には、「何でも自分でこなしてしまう、手のかからない子に育ちました」と書いてあったことを覚えている。あの頃の私は、今よりもずっと弱くて、幼くて、家族への甘え方すらもわからなかった。今、母にもう一度手紙を書いてもらえるとしても、母はきっと、「手のかからない子に育ちました」なんて、

書いてはくれないと思う。あの頃、家族に頼らなかった分、今、私は家族に頼ることが出来るようになった。今なら、家族のありがたみが痛いほどよくわかる。

今の幸せな家族の形が、この先も続いていくのだと思っていたが、姉の結婚が決まり、姉が家を出ていくことになった。

その日に、私は三度目の、忘れられない母の涙を見ることになるのだろうか。その時流す母の涙が、どうか喜びの涙でありますように。

<講評>

母親と自分との親子としての関わり合いと家族というものの大切さを、己の幼い頃の体験を基に、素直な気持ちと優しい視点で、自然体の読みやすい文章で綴った優れたエッセイである。感心すること、奇を衒ったところが微塵もない、素直で率直な文章である。書かれている内容も家族の波乱と著者の成長の物語として、悲劇を含む内容であるにもかかわらず、すがすがしい読後感が残る。また、話の構成、表現力、人物描写に優れている。加えて、読者の心に染み入るような繊細な筆致での情景表現が秀逸であり、読者に深い感動を与えている。涙の話ながら、語り口は情緒過剰な様子はまったくみられず、どこか淡々とさえしたシンプルで読みやすい文章の中にも場面場面の情景が描写され、私と母の涙を軸に、一つの「家族」の変遷が描き出されているように思う。軸がしっかりしているからこそ、さまざまな場面を描きながら、説明不足とも感じない。なんだか映画のように情景が想像された。

審査委員／永田彰子、吉目木晴彦、大庭由子、西村聡生、富岡治明（委員長）